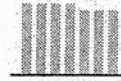
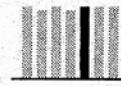


# 挑む



## 変化のとき

長野県小布施町の図書館「まちとしょテラソ」は、一見、真新しい美術館のようなたたずまいだ。

中に入ると確かにそこは図書館なのだが、約千平方メートルの平屋建ての建物には壁やしきりがなく、空間の真ん中に書棚が並び、周りを利用者が思い思いに使えるテーブルやソファが囲む。ドーム形の高い天井を支える木の枝を模した柱もあいまって、大空に広々と枝をのばす大木の下で人々が本や新聞を読み、静かに談笑する風景を思わせる。公募により2007年、館長に就任した花井裕一郎さん(48)は言う。「ここは一つの世間、コミュニティなのです」

1923年に開設した小布施町立図書館は、町役場庁舎の3階に移転した79年以後、不便さやスペース不足が問題だった。豪商・高井鴻山が江戸の浮世絵師・葛飾北斎を招くなどして「文化村」を形

情報で人と人、地域と地域を結ぶ

まちとしょテラソ館長 花井裕一郎さん(48)

成した機運は健在で、町民と行政が数年にわたって議論を交わし、昨夏、新たな図書館が誕生した。

「交流と創造を楽しむ文化の拠点」、そして「学び・子育て・交流・情報発信の場」であることが理念。親子の体操教室も開けば父親による読み聞かせ会も、アート教室も映画上映会も開かれる。

蔵書は約6万冊。加えて国立情報学研究所が開発した「想RFIDシステム」も導入した。ICタグをはった新書をリーダーに置くなど、その新書の内容と関連する本や文化財の情報、百科事典の項目などが表示される。ここに「小布施」独自のデータベースを加える作業を進めている。導入は花井さんの希望だった。「都会からもたらされた『知』と地域の情報がリンクし、新たな『知』の領域が広がる可能性がある」という。

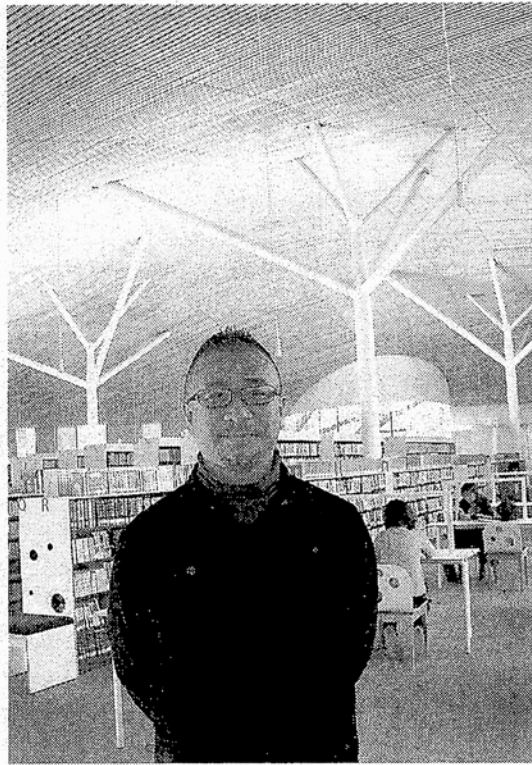
理想は、図書館のもつ情報力が

## 図書館の可能性広げる

人と人、地域と地域をつなげ、「面」で文化拠点となることだ。

「美術館や博物館と連動した情報発信のあり方を検討し始めたところです。図書館法には住民の『教養や調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設』とありますが、確かに『知』とは本や映像、音楽など様々なものから得られるひとかたまりのイメージのようなもの。多面的なアプローチは図書館本来の姿です」

場の「演出」にも心を砕く。スタッフには「コンシェルジュであれ」と命じ、花井さんも館長席を入り口近い受付に構え、暇さえあれば館内を見て回る。館内には穏やかな音楽が流れ、利用者は節度を守ればおしゃべりしてもいいし、テーブルも長時間、利用できる。時にはマナー違反でスタッフに注意される子供もいるが、それも一つの「演出」だ。「注意するのもされるのもコミュニケーション。コミュニティには、貼り紙よりも、声をかける近所のオジサンやオバサンの存在のほうが、重要ですから」



浜田奈美撮影

はない・ゆういちろう 1962年生まれ。テレビ番組などの映像ディレクターを経て、映像作家。2000年、東京から小布施町に移住。07年12月から小布施町立図書館(まちとしょテラソ)館長。

小布施町は「街づくり」に熱心で、かつ成功したことで知られる。この図書館を多くの人に開かれた場にしようと打ち出したのも「実に小布施らしい」と花井さんは言う。多くの人が集える、街づくりの拠点としての空間と図書館を位置づけた。小布施モデル。図書館の利用者減、そしてコミュニティの寸断に悩む地域へ、広がってゆくかもしれない。(浜田奈美)